曇鸞と僧肇

——不思議の語をめぐる——

藤 丸 智 雄

曇鸞の現存する著作は、道藏中の短編を含めても極めて少ない。彼の思想を再評価するためには、自ずと思想上の連続性の中で彼を何処に位置付けるか、ということが重要な鍵となる。本論では、『浄土論註』（以下に『論註』）に示される曇鸞の思想と僧肇思想との交争を糸口とし、最終的には、不十分だが中国思想史上における位置についても言及する。その考察には、以下の問題を論ずる必要がある。①曇鸞はア僧肇から如何なる点で影響を受け、イそれが曇鸞の思想にどのような意味をもったか。②僧肇から曇鸞へと継承される思想上の特質は、中国思想史上で如何様に位置付け得るか。

①—ア 『肇論』・『注維摩経』（以下に『注維』）からの引用が、『論註』に多く存在する。ここで、引用の総体を検証することはできない。そこで、浄土注釈の軸となる〈不思議〉という語に着目し、僧肇との関係の一断面を見て行く。〈不思議〉は、多くの仏敎書に多出する語である。曇鸞が〈不思議

〉を用いる時、『維摩経』を念頭に置いていることは、曇鸞が〈不思議〉による注釈のまとめとして用いた次の文章が示している。「言略者。彰彼浄土功德無量。非唯十七種。夫須弥之入芥子。毛孔之納大海。豈山海之神乎。能神者神之耳。」傍線の部分は『維摩経』不思議品の内容と一致し、『維摩経』が念頭に置かれたことを確認しうる。『維摩経』には、不思議品が有る様に〈不思議〉が重要な位置を占めるが、先述の如く〈不思議〉は頻出する概念であり、『浄土論』（以下に『論』）の〈不思議〉を『維摩経』に直結することは出来ない。曇鸞が注釈上の機軸としたことの要因は、『注維』不思議品中の僧肇注を参照することで鮮明になる。僧肇の注釈に「智周万物而無照。権積衆徳而無功。冥寛無為而無所不為。此不思議之極也。」とある。「無為而無所不為」が〈不思議〉の極みと説かれる。「無為」と「無所不為」とは矛盾するが、僧肇に於けるこうした矛盾的表現は著作中に多用され、彼の思想を

彩る重要な特徴の一つである。これが〈不思議〉を説明する中で用いられている。『維摩經』不思議品では人智を超えた具体的な現象が物語られ、それらは心に〈不思議〉という感情を催させるが、この〈不思議〉な現象の背後に、「無為而無所不為」と矛盾的表现で表わされる主体の在り方が有ると、僧肇は『注維』で注釈するのである。外の現象に対し、内に「無為而無所不為」という仕組を置くのである。

①—イ 『論註』で〈不思議〉は下巻での国土の莊嚴を注釈する軸となっている。曇鸞は、十七種の莊嚴の各々を〈不思議〉により説明するが、『論』自体はそれを要請しない。

『論』の〈不思議〉は、「彼仏国土莊嚴功德者。成就不可思議力故。」の一箇所のみである。〈不思議〉は、阿弥陀仏の力を修飾する。勿論、阿弥陀仏の力と国土の成就は相応するから援用に矛盾は無いが、唯だ一度のみ登場する〈不思議〉を注釈の軸として敢えて選択した曇鸞の意図は見えてこない。その意図は、〈不思議〉という言葉の具体的な援用の仕方により検討する必要がある。国土について注釈する中で曇鸞は、「明彼淨土是阿弥陀如来清淨本願無生之生」と説明する。この傍線部は、先に例示した僧肇の〈不思議〉の説明同様、矛盾的表现である。これ以外にも、国土にまつわる説明中で、曇鸞は度々こうした矛盾的表现を伴う注釈を行う。重ね合せると、僧肇の『注維』に於ける〈不思議〉の注釈と、曇鸞の

淨土注釈の構造の類似を指摘できる。『維摩經』不思議品同様に『論』に〈不思議〉な感情を惹起する現象が示され、而もその具体的な現象を〈不思議〉により注釈し、その〈不思議〉な現象は矛盾的表现を以って表わされる。〈不思議〉という言葉を用いる時、我々の眼前に現出する事象そのものを表わすと共に、矛盾的表现（無為而無所不為・無生之生）でのみ示されうる、現象の背景にある行為者の有り様をイメージさせることも意図されているのである。このように、曇鸞の淨土注釈に於ける〈不思議〉の援用と、僧肇の〈不思議〉は対応させて考え得る。これは、曇鸞の淨土理解の何を意味するのか。それは、二点に纏められる。第一は、淨土の清浄性である、淨土と称される様に、阿弥陀仏の国土の第一の特質は清からさである。これを曇鸞も重視する。というのも、具象として説かれる淨土は、一見、此土の延長線上の極にあるかのようである。それだけに、注釈者曇鸞にとってこの点は克服すべき重要課題であったと推測される。例えば、淨土の十七種の莊嚴に関して『論』中に「十六句及一句」という表現がある。一句が特別のものとして、他の句と区別される。本来「莊嚴一切所求満足功德成就」である「一句」を、曇鸞はあえて「莊嚴清淨功德成就」に配当し、これに十七種の莊嚴を総括するものという評価を与える。この例は、曇鸞の淨土の清浄性の重視を示している。曇鸞はこの清浄性について「夫

法性清淨。畢竟無生。」と説く。これは先に示した「明彼淨土是阿弥陀如来清淨本願無生之生。」を説明した中の一文である。矛盾的表現の否定形（無生）を、淨土の清淨を示すものとして曇鸞は利用している。これが、〈不思議〉によつて

淨土の莊嚴を纏める一つの意図である。第二は多様性である。淨土は、『論』中に十七の具体的様相に分けて説かれる。淨土のそうした多様性は「略説入一法句故。一法句者。謂清淨句。清淨句者。謂真實智惠無為法身故。」とされ、一者に包摂される。一者は阿弥陀仏である。その阿弥陀仏から多様な存在が展開する構造を、「法身無相也。無相故能無不相。是故相好莊嚴。即法身也。」と曇鸞は説明する。この破線は、

先の矛盾的表現と同様の表現形態である。これは、限定的な存在を採らない（無為・無相）ことにより、全ゆる存在へと展開しうる（無所不為・無不相）ことを示す。淨土でいえば、十七種の救済の形へと展開する訳である。更に、一応十七に纏められ表現されるが、「彰彼淨土功德無量。非唯十七種。」と曇鸞が説く様に、救済の様式は無限定である。つまり、淨土は多様、更には無限定な在り方をしていのだが、その多様

↓無限定は〈不思議〉という言葉の背後にある矛盾的表現により論理付けられるのである。以上のように、『論』に唯だ一度用いられた「不可思議」という言葉をもとに、僧肇思想との関連の中で〈不思議〉を淨土注釈の軸とし、それにより

淨土に清淨性と多様↓無限定、という二つの特質を付与したのである。

②このような僧肇から曇鸞への連続性を中国思想史中に置くこと、『老子』の「道常無為而無不為」にその淵源を見ることができる。『老子』中にあって「道」は一切の存在の生成因であり、諸存在中に遍満する根源的實在とされる。勿論、『老子』に於ける無は無という存在に止まり、曇鸞に直結することは出来ない。ただ、三・四世紀に老莊思想を大成した郭象に至れば、無を存在として理解することを拒否し、より僧肇・曇鸞へと近似する。矛盾的表現を通じて、中国思想の中にある曇鸞の姿も又浮かび上がってくるのである。

以上、〈不思議〉という言葉を通して見ると、曇鸞が中国思想史上の根源的な存在追及の外にあるのではなく、逆に中国思想史上熟成されてきた矛盾的表現を〈不思議〉を介在させて用いたことが分かる。その〈不思議〉という概念の援用は、淨土を限定から解き放ち、阿弥陀仏という一者からの展開を可能にし、救済という実効性を付与しつつも、清淨性を維持することを可能にしたのである。

〈キーワード〉 曇鸞、僧肇、不思議

（東京大学大学院）